

「たましいという問題」

三浦 佑之

「遠野」という場所に関わって

よろしくお願いいたします。三浦です。私は、何もまとまった御話ができません。葉山さんのように文化財の救出を具体的になさっているとか、山田さんのように、ご家族やまわりの方が被災されたという状況と、まったく違います。完全に外にいて、何をすればいいのか、とあたふたあたふたし、何もできないなあ、と無力感に襲われているという状況にいると思います。

ずっと以前から関わっている遠野という土地を通して、考えていることをお話しさせていただきます。遠野では、去年（二〇一〇年）がちょうど「遠野物語」一〇〇周年というところで、いろいろなイベントがありました。そのなかで、二〇一一年が新しい一〇一年目だということで、遠野文化研究センターを遠野市で立ち上げて、そこで、「遠野物語」を越えてもっと広い活動をしようということになり、二〇一一年六月に発足する予定で、準備をすすめていました。その矢先、三月十一日に震

災がおこって、それですっかり予定が変わってしまいました。その中心にいるのが赤坂憲雄さんで、遠野文化研究センターのセンター長になったということもあって、私もそのお手伝いを少ししています。

今回の震災があつて改めて感じたのですが、遠野というのは『遠野物語』をお読みいただくとよくわかると思いますが、釜石、大槌、吉里吉里、船越、山田そして宮古と、釜石から宮古までの間の三陸の海岸線、五、六〇キロあるでしょうか、その海岸線と、非常に強いつながりを持っています。「遠野物語」でも、いくつも地名がでてくるのですが、そのつながりの強さが、今回の震災によつてよくわかりました。

たとえば、大槌は被災してほとんど街が全滅してしまつたわけですが、直ぐに食料を手にいれようと思つて、大槌の役場の職員が海岸線は走れないので、山のなかに入つて援助を求めようとする、一番近いのが遠野なのです。それで、震災当日のことですが十一日の夜、遠野に来て、米を手に入れて、ガソリンを手に入れてもどり、被災したかたがたに炊き出しをするこゝとができたそうです。一方遠野では、電気が切れて情報が入らなくなり、海岸線で何が起きているかよくわからないけれども、わずかな情報によつて大変な津波が襲つたらしいといふので、すぐにその日からオニギリを作つて炊き出しをはじめ、次の日には支援体制を整えて沿岸地域の支援活動を続けました。今もその活動は続いています。

そのなかで、さきほどの葉山さんのDVDのなかにも出てまいりましたが、遠野では、三陸一帯の文化財のレスキューをやっており、塩分や泥を洗い流し、乾燥させて保存するというような活動を続けています。その活動がひとまとまりしたものですから、二月二十六日から三月十一日にかけて、「震災から蘇った東北の文化財」展を、東京都立中央図書館で開催しました。その展覧会で、博物館の資料がどのように保存されていくかというところが、具体的に展示され、現在は会場を東京から遠野に移して展示をしています。

その展覧会に合わせて、遠野市が主催しているものですから、赤坂さんと私とで、三月四日に文化復興にかかわる対談をしました。

「遠野物語」第九九話の語りかけること

私たちは、文化財の復元といったことについて話すことはできないので、「遠野物語」に関わるお話をしたのです。その時の資料を使いまわして申し訳ないのですが、お手元にお配りしたのは、「遠野物語」第九九話の、よくご存知のお話です。

この第九九話の話は、佐々木喜善さんの大伯父（喜善の父方の祖母チエの兄）にあたる、北川清さんの弟の福二さんという方が、大槌から北にいった山田町、その山田町の田の浜というところの家に婿入りをしていて、明治二十九年の三陸大津波に

遭い、奥さんと子供が津波に流され、自分と子供ひとりか二人が生き残って暮らしている、その時にあった話です。ある時、夜、厠に起きたら、海のほうから女の人と男の人が出てきて、自分のそばを過ぎてずっと歩いていく。よく見たら、その女は自分の女房だった。その女房と一緒にいる男は、自分が婿入りする前に女房がつきあっていたという噂のある男だ。で、どこにいくんだと尋ねても何もいわない。子供は可愛くはないのかと言うと、「女は少しく顔の色を変へて泣きたり」とありますが、そのまま二人はすうつといなくなつた。そういう話です。

『遠野物語』でもっとも有名なお話の一つですね。その話を読んでいて、私が興味をもつたのは、水野葉舟が明治四十二年に佐々木喜善からこの話を聞いて、第一勧業銀行の月報に紹介していることです。また、それからだいぶ経つた昭和五年に、佐々木喜善自身が、「縁女奇聞」という文章のなかで紹介している。同じ話が三つあるのですが、その三つの話を比較していくと、内容がずいぶん違っている。

たとえば、水野葉舟の場合には、向こうのほうから女がスタスタ歩いてくる、女房だったので、「お前は今どこにいる」と聞くと、女は「ニヤニヤ」笑って、私は今、あつちにある男と夫婦になっていますと答えるなど、えらく元気なんです。ところが柳田の話は、そんなふうにスタスタとは歩いて来ないし。ニヤニヤとは笑わない。また、水野葉舟は「怪談会」というタイトルをつけて紹介しているように、怪談を語り合う会でこの

話を語ったものを紹介しているのです。当時、怪談が流行っていたというようなことは、石井正己さんが書いていらっしやいます。一方、喜善の話も、読んでいただくと思われる通り、柳田の話とはずいぶん違います。ではなぜ、柳田国男が採録した遠野物語の話はこういふふうにしんみり語られるのか。昔の恋の物語のように語られている、そういうしんみりしている。

その三者の違いを比較しながら、何が違うのだろうかということを考えていたのです。ところがどうも、そういう問題とは別のところに、この第九九話の話は存在したのではないかと思うようになりました。

「幽霊」とたましいという問題

『遠野物語』のなかで、明治二十九年の津波に関する話はこの話だけです。今回の震災を受けて、なぜこの話だけが震災に関わる話として存在するのかと考えました。ほかには、まったく痕跡がありません。

明治二十九年の大津波に関して柳田国男は、「二十五箇年後」という文章を『雪国の春』に載せています。よく引用される有名な文章ですが、悲惨な話はほとんど消えていって、奇跡的に助かったような話のほうが残っていくのだというようになことを書いています。しかし、この話はそうした幸運を語る話ではない。

水野葉舟がニタニタ笑うと語るのは、幽霊を強調するため

しょうが、最近、この話を伝えていくのは、葉舟の意識とは別かもしれませんが、幽霊という問題ではないのかということに気づきました。幽霊と言ってしまうと違うのですが、「たましい」という問題なのではないのかということ。今日、葉山さんのお話をうかがいましたが、葉山さんの対象はモノですね。そうしたモノ、文化財をレスキューすることに対して、話を伝えるというのはどういうことだろう。また、山田さんがおっしゃった、聞いてあげてほしいということ、それはおそらく、モノではない言葉だと思うのですが、そういう関係がどういふふうにあるのかということに、大変興味を持ちました。

そのきっかけになったのが、なぜ第九九話が幽霊を語り、なぜ死んだ女房が幽霊になって現れてくる話が、このように語り伝えられるのかということです。

そのようなことを考えていて、はたと思いついたのは、『読楽』という文芸雑誌に連載されているドキュメンタリー作家、石井光太さんの「津波の墓標」という文章でした。石井さんは、『遺体 震災、津波の果てに』(二〇一一)という、今回の津波で数多くの遺体が出て、その処理が切実な問題になったのを一つ一つ点検なさったドキュメンタリーを書いていらっしやる方です。その石井光太さんが、「津浪の墓標」という連載で、津波があつてそんなに日が経っていない時、陸前高田の海岸で出会った体験を記しています。石井さんが土地の漁師さんたちに話を聞いていたときの出来事だそうです。ちよつと読んでみます。

「しばらくして遠くから車のヘッドライトが近づいてきたと思うと、闇の中からホンダの軽自動車が見えた。焚火を囲む人たちの家族が迎えに来たのだろう。だが、運転席にすわっていた五十代の女性は降りようとはせず、窓を開けて慌てた声で叫ぶように言った。／「ねえ、大変なの。向こうの川辺に幽霊が出たんだってさ！ みんな集まっている。ねえ、私たちも行こう！」／焚火の前にいた住民たちが急に色めきたった。女性の夫が子供とともに軽自動車に乗り込むと、他の者たちも近くに止めてあつた車へと走り、後を追いかけて始めた。人の車に乗せてもらってまで向かおうとする人もいる。どうしてお化け話一つにこんな騒ぐのだろう。私は解せない気持ちを抱えながら、とりあえず一緒に乗り込んで彼らの後をついていった。／たどり着いたのは気仙川のほとりだった。すでに数人が集まっており、懐中電灯を握り締めてあたりを見回していた。足元すら見えないほどの真っ暗闇だ。後から来た者たちは瓦礫に足をとられ転びそうになりながら近づいていくと、先に来ていた人たちに尋ねた。／「なあ、幽霊が出たのか？ ここに出たのか？」／一人が答えた。／「ああ、そうらしい。けど、見てねえんだよ。どこにいるのかわからねえんだ」／「その幽霊はどういう顔をしていたんだ」／「知らねえよ。見えねえんだから」／集まった人々は真剣な顔をしてライトをあちらこちらに向けた。交差するラ

イトの明かりが彼らのはやる気持ちを表している。そして一人が寂しそうな声で、こう言った。／「ああ、いなくなっちゃったのかな……幽霊だったとしても会いたかったのに」／それを聞いた瞬間、私は後頭部を殴られたような気持ちになった。なぜ大の大人が幽霊と聞いて、ここに駆けつけたのか。彼らの大半は肉親の遺体が見つかっていない。だからこそ、彼らにとつては幽霊でもいいから亡き家族と再会したいと思つていたにちがいない。それで、幽霊が出たと聞いた瞬間に、うちの家族の霊ではないかと思ひ、先を争うようにしてここに駆けつけたのだ。／「いねえよ。やつぱりいねえ。ちくしょう」／もうひとりが悔しそうに言う。あきらめられない者はまだライトであたりを照らしている。／ライトの明かりはその後いつまでも交差し合い、人々の未練を表すように同じところを行ったり来たりしつづけていた。」

〔読楽〕二〇二二年三月号、徳間書店、／は改行部分

この文章を読んでわかったような気がしました。それで、三月四日に赤坂さんと対談したときに話したのですが、赤坂さんは震災後も何度も三陸海岸を歩いているのですが、最近歩いてると、しばしば幽霊の話や聞くというのです。あちこちで幽霊が出るという。それはおそらく、行方不明の方が、まだたくさん残っているというのと関わっている。そして、それが「遠野物語」の第九九話が語られる背景と同じなのではないか。そ

ういなかで、この幽霊の話は語られる。死んだ女房が帰ってくる、しかも好きだった男と添い遂げながら生きていく。というか、向こうの世界にいるという、そういう話を語らなければならなかったのではないか。そのようなことを、この石井光太さんの文章を読んで気がつかされたのです。

ここにいる多くのメンバーが口承文芸学会に所属していて、「語り」とか「口承」という問題に関わっている。その「語り」において、死者を語るということ。今後、今回の津浪や震災に関わって、死者を語るということはとても大きな問題になっていくだろうと思うのですが、死者を語るというのはどういうことだろう。兵藤さんもこの場にいらっしやることだし、鎮魂という問題も含めていろいろなことを考えてみなければいけないのではないか。そんなことを、三月になってからしばらくのあいだ考えておりました。

私からは、お話できるのは、そのようなことしかありません。

(みうら・すけゆき／立正大学)

* * *

三浦 今、こういうお話をしたのですが、葉山さん、モノの問題と、もう一つ死者の問題が、どういうふうにあると思いますか？

葉山 なかなかむずかしいところがあると思います。というの

は、尾形家のひとびとは、皆ご無事で、私が、犠牲者のいる家族に直接にお会いするということがありませんでした。したがって亡くなった方については、どう答えていいかわからないところがあるのですが……一緒に作業をしている気仙沼の人たちのなかには、直接、幽霊を見たという話はないのですが、作業をしていると、気仙沼の人たちがする幽霊話というのは、随分、ありました。

で、それが家族に会いたいということで、出てきたのかどうかは、わかりません。それにしても幽霊の話は、近しい人びとを失ったことを災害で生き残った人びとがどう納得していくかということが、現在の被災地で課題となっていることに気づかせてくれます。つまり幽霊の話が語られる場には、起こったことへの納得という問題があるのだということ、改めて御話を聞いて、思い当たった次第です。

三浦 山田さんは何か？

山田 この話を聞いたときに、思い出したことは、最近、石巻では、タクシーに乗せてくれと来て、そして、のせているとしばらくして消えるという定番の話が、すごく流行っているということ。シートが濡れているという、あの話がすごく流行っているというか、語られるらしいのです。

幽霊の話というと一つの型にはめて考えてしまい、ああ、そういう話によくあるよね、現代伝説だよ、ととらえがちなのですが、三浦さんのお話を聞いて、現代伝説だよ、と

すまることができない、もつと深いところにそれを語る意味というものがあるのかな、と思いました。

三浦 で、九九話に関しても、「遠野物語」でこのパターンというの、五五話と全く同じなのですね、五五話というのは、河童に魅入られて、河童の子を生んだ女の話なのですが、あれも、好きな男がいたのに、引き裂かれて別の男と結婚させられたという、そういうかたちでいえば、これも定番のパターンだと思っんです。だけど、パターンだと思いつつ、そして柳田もそういう話が好きだよ、とつい言ってしまったりするのですが、どうもそれだけではなさそう、ということこの九九話を通して改めて考えたのです。

* * *

おわりに

フロアからのことばを含めて

重信 幸彦

この後、フロアからの質問、意見交換等が行われた。紙幅の都合で、その記録を掲載することを断念せざるをえないが、ここにそのうち幾つかの概要を記しておきたい。

まず、救出したモノのその後のありかたについて、葉山氏がマスコミに対する説明として「復興には建物やインフラ整備などのハード面の復興と生活や文化などのソフト面の復興の両面

があり、ハード面の復興がどれほど進んでもソフト面を充実しなければ結果的に本当の復興にはならない」と述べたことをふまえ、サルベージされたモノとしてのワラ打ち石や筆筒も、瓦礫であったモノとして展示・保存するなどハード面を担いうるのではないか、という意見が述べられた。それに対して葉山氏は、やはりモノをめぐる物語が、発掘されなければならないだろうと応えた。

また、「瓦礫」をめぐるのは、モノを救出するにあたり、結果的に「瓦礫」かそうでないか、その線引きをすることになるが、現場ではどのようなことを意識していたのか、という質問があった。それに対して葉山氏は、難しい問題であるとした上で、歴博と尾形家との関わりがあった経緯から尾形家の生活用品を救出することになったこと、そしてあくまでも、尾形氏が残したいと思っているモノを丁寧に聞き取りながら、モノを取り上げていくしかなかったと述べた。そして、予め「文化財」と意味づけられたわけではない生活用品を瓦礫から取り上げる過程こそが、改めて「瓦礫」とは何かを問い直す契機でもあったと述べた。

さらに、今回の震災で、学のある方そのものが問い直されざるをえないという状況について、いくつか発言があった。

一つは、歴博という場の可能性を問う次のような意見であった。今回の震災では、被害の大きかった集落とそうでなかった集落など単なる偶然ではない違いもあり、それを村落の成立状

況や村落の構造などから問う必要があるだろう。その意味では、民俗学や歴史学というデイシプリンの差異が問い直され、激しく壊された事態でもあったといえ、歴博こそ、そうした学問のデイシプリンの差異を超えて新たな歴史の問いかたを構想できる場なのではないか。

また学問の境界を越えて実践する必要性を指摘する次のような声もあった。

この震災で、建築学会の雑誌などでは、これまでの自分達の蓄積が壊れてしまった、そこで学の境界を乗り越えて一からたて直そうという姿勢を前面化している。学者が何らかの当事者としてふるまうことの難しさを踏まえたいうで、なお、総じて私たち人文系のほうは、どちらかというところとした他の分野のことを十分に参照していないのではないかと感じている。

この他、役に立ちたいと思い、現地で行なった自らの活動について触れた発言があった。現地で、「群読」をして被災者とともに声を出し元氣付けられないかとポランテアに行ったが、そこでは結局、被災の体験談を「聞く」ことに終始した。それでよかったと今は思っている。そもそも何かしてあげようとか、勇気付けようとか、役に立ちたいという立場では、到底対応できるものではないことを実感した、今後も、そうした自らの立ち居地を問い直しながら、自分の関わりかたを考え続ける必要がある。

おそらく「三・一一以後」は、今後も長く続くだろう。学会

としてそれに向き合う機会を一過性に終わらせるのではなく、その時、その時代のなかで常に問い続けるためにも、こうした企画を継続していく必要があるだろう。

この第六二回研究例会を、その第一歩として位置づけたい。

付記 登壇者三氏には、例会での話題に関連する次のような文献がある。

葉山茂 二〇二二

「東日本大震災に民俗学はどのように立ち向かうのか 東日本大震災にともなう国立歴史民俗博物館の被災文化財救護活動」

『日本民俗学』第二七〇号

葉山茂（小池淳一と共著）二〇二二

「民家からの民具・生活用具の救出活動―宮城県気仙沼市小々汐地区―」（国立歴史民俗博物館編『被災地の博物館に聞く 東日本大震災と歴史・文化資料』吉川弘文館）

山田栄克 二〇二二

「山田家の日常 宮城県東松島市野蒜字亀岡の民俗」（『昔話伝 説研究』第三十二号）

三浦佑之 二〇二二

「三つの九九話―『遠野物語』と明治三陸大津波」（『立正大学大学院紀要』第二八号）

（しげのぶ・ゆきひこ）